

英語教師の力を問う

— 何を鍛えたらよいか —

山田 政美

0. Prolog

英語教師に問われる英語力にはどのようなものがあるのか、という観点から以下の論を進めたい。

外国語科教育（英語）の目標を、影浦（1993）は、

- 1) コミュニケーション能力の育成
- 2) 積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成

3) 言語や文化に対する関心と国際理解の育成
だとし、「言葉はコミュニケーションの手段であり、言葉の指導に当たっては、このことを認識し、指導の目的を明確にする必要がある」と強調する。そして一挙に教材と指導法の問題を展開するが、残念ながらその主張を支える言語観が見えてこない。これは英語教育の分野での議論に共通しているところだと思えてならない。

コミュニケーション能力の育成を目指すということが強調されてきているが、それは一体どのような能力であると考えればよいか（山田 1993b など）。¹⁾

新里（1996）が次のように解説する部分がある：

特定の言語材料の活用練習ではなく、英語を使ってある課題を達成することが目的の活動であれば、言語材料を活用する面での誤りはあまり問題にせず、場面に合った語彙や表現形式を選択できないことが深刻な誤りとなる。例えば、“Why don't you become a moderator?” と言ってグループ討議の司会者になるように勧めている場面で、“Because I can't ~” のように答えるのは誤りとなる。このように、活動の目的に応じて誤りの深刻さが異なることを念頭に置く必要がある。

誤りに関する考え方が示されているわけだが、これはどのような能力と係わるというのかが見えてこない。解説は多いが、その背後の言語観が、ここでもまた見えないわけである。

ついではながら、この解説の中に例として示された“Why don't you...?” [Quirk *et al.* (1985 : 833) では quasi-imperative と呼ぶもの] が、単純に「場面」とだけ結び付けられているが、この解釈もはっきりしていない。この点が、最後に述べるよう

に、言語的な基礎知識が欠落している証拠となる。言うまでもなく、

Why don't you conveys advice, but it frequently has a critical and irritable tone, since it is used when the hearer has not performed or is not performing the recommended activity:

Why don't you take sleeping tablets?
[‘Anyone else would.’]

(Quirk *et al.* 1985 : 821)

であって、そうであるならば「場面」もまたそれに相応しいものでなければならない。

あるいは、“Because I can't ~” のように答えてはならないと言いたいのなら、

Why don't you be quieter? [Quasi-imperative]

Why aren't you quieter? [*wh*-question]

のような対比が可能な場面を考えるべきである。

さらには、

Take a rest, *why don't you?* (Quirk *et al.* 1985 : 829)

のような、一種の付加疑問的な表現も生ずる特性を承知しているかどうか、疑問である [cf. 村田 (1984 : 37) が、指導上のポイントとして指摘したのはよい]。

1. 談話が分析できるか

1.1 電話の談話の構造を考える

例を挙げてみよう。*Sunshine English Course* 1 (開隆堂, 1992, pp. 20-23, Program 4) は、この学習時点ですでに国際電話での対話を訓練させる。概ね次のような発話の内容と順序になっている。

アメリカの自宅へ電話するエミリー

Hello, this is Emily.
 - Hi, Emily!
 Is this Dad or Steve?
 - It's Steve.
 - How's life in Japan?
 I like it very much. ... (1)

これはかなりの疑義のある教材であると思われるが、これを扱う教師にはどのような解釈力があればよいのだろうか。

まず、早くは Schegloff (1968)、山田 (1977) が指摘したように、英語での電話での対話を

Summons Sequence →
 Summons + Answer + Continuation + Response

のような構造であると分析するならば、

1. Caller : (Telephone bell) [Summons]
2. Answerer: Hello.
3. Caller : Mrs. North. Helen?
 (山田 1977)

のように考えてよい。そうであるなら、前出の教材では

(1') Telephone rings.
Steve: Hello.

Emily: Hello, this is Emily.
 Steve: Hi, Emily!
 Emily: Is this Dad or Steve?
 Steve: It's Steve. How's life in Japan?
 Emily: I like it very much.

のように整理すれば、点線枠内の会話開始部分が欠落していることになる。Summons Sequence を無視したことになるのではないのか。²⁾

あるいはまた、self-identification の表現をどのように考えるのか。山田 (1986) を見れば、その仕組みが分かる。

電話による談話表現については山田 (1977) 以来注目してきたが、Kettering (1975) や Fox *et al.* (1980) などこの教材の典型的な好例を見ることができる。その談話構造の分析は橋内 (1985) や小野寺 (1992) などが興味深い。

一般に英語教師のための談話分析の手ほどきには

McCarthy (1992) がよい。

1.2 含意 (implicature) が分かるか

今井 (1995) は示唆に富む議論を展開して見せた。

- (3) A : Is Jane a good cook?
 B : No, she isn't.
 C : She's English.

答えの B は、明解ではあるが、それがもたらす情報の量はあまり豊富ではない。しかし、C は、

- 1) ジェインはイギリス人である、
- 2) イギリス人は一般に食べ物の味に無頓着であり、料理が下手である [という “定説”]、
- 3) C 氏はイギリス人一般の料理の腕を低く評価している [“定説” を支持している]、
- 4) C 氏はジェインが料理下手な原因を彼女がイギリス人であることに帰している、
- 5) C 氏は自分がユーモラスな話し手だと自認している、
- 6) C 氏は自分のユーモアを A が理解し面白いものと期待している、

などの多くの情報が読み取れるのではないか。しかし、発話そのものによって伝えられるのは言うまでもなく 1) だけである。言語記号を文法的・語彙的にどう分析しても、それだけの情報である。

英語教育の口頭練習はこれでよしとせざるを得ないだろうが、それは通常の談話では「上等な」返答ではあるまい。イギリス料理についての世評とか、イギリス人が得意とするユーモアを理解しているなら、C の返答の深くにある含意 (implicature) が談話を意味あるものとするまで、英語を扱う教師は訓練されているべきである。

1.3 文の特性が分かるか

まず、次の例を見られたい。

- (4) “Aren't these potatoes delicious?”
 “Yuck.”
 “Do have some more, Gertie, since you like them so much.”
 “I eat better at nursery school,” said Gertie. “We have big chocolate doughnuts.”
 “Really? I must talk to the head of the nursery school about it.”

—William Kotzwinkle, *E.T.*, Futami, 1982, p. 77

まず、最初の発話の中の *delicious* に注目したい。これは山田 (1982) が早くから指摘したように、通例は否定文や疑問文では用いられない [+assertive] の意味特性を持つ語である (さらには、安藤・山田 (1995) など)。³⁾

では、否定疑問文で使われているのはルール違反ではないのか。

ここで考えることは、Yes-No 疑問文で否定疑問文には、片寄り (bias) に特徴があり、それは「肯定の片寄り」(positive bias) であるということになる (太田 1980 : 623-26)。つまり、

(5) *Aren't you going to George's party?*

では、話し手には “Maybe you are (going to George's party).” という気持ちがあつての発話であろう (cf. Lyons 1977 : 765)。

そこで、(4)は、

(4') このポテトおいしいわよ。

と言いたい気持ちが先行している。だからこそ、肯定対極表現 (affirmative-polarity) の *delicious* が使われた。文の形式を越えた、意味が優先したところである。

次に、命令文の

(6) *Do have some more, Gertie, since you like them so much.*

にはどんな意味があると考えればよいか。文頭の *do* は「説得の *do*」(persuasive *do*) (Quirk *et al.* 1985 : 833, 1415) である (また、安藤・山田 (1995))。つまり、(4') の自信たっぷりのその発話 [母親] に対して娘 [ガーター] は、「ゲー」と拒否反応を示す。⁴⁾ その拒否反応を押しえ込んで「そんなこと言わないで、もうちょっと食べなさいよ、ガーター、あんたはポテトが大好きなんだから」と、ガーターの嗜好を承知の上での発言である。

さらには、英米の差、性差など、この表現形式がもつ他の特性が分かっていないといけな

1.4 「念押し」の現象が分かるか

談話を考えてみれば、話し手と聞き手の間の、言葉を紹介しての一種の綱引きであることが分かる。こ

れがいろいろな形式をとって現れてくるが、その一つに「左方転位」(left dislocation) と「右方転位」(right dislocation) がある。この現象は早くから紹介されていて、安井 (1978) とか村田 (1982) が示唆的であった。あるいは、福地 (1985) もよくまとまっている。

右方転位とは、「まず、言わなければならないことを言っておく。それから、それが何についてであるか、念のため、知らせる」(Halliday 1967 : 240)。

(5) “So *you* were waiting in the basement,”
he said, “*you and Carella*...”

“Yes, sir.”

“...for the signal to assault.”

—Ed McBain, *Kiss*, Avon, 1992, p. 158

「それで、あなたたちは地下室で待っていた。あなたとキャレラが…」と彼が言う。

「ええ」

「突入の合図を待っていた」

この場合は特に、人称代名詞の *you* の数に関して形態上のあいまいさがあつて、念押しが必要で、あわてて “you and Carella” を付け加えたとも言えよう。

左方転位は、話題化 (topicalization) との違いを考えておかねばならない。まず、左方転位の例を挙げる：

(6) *The thieves in this city, they gave you a bigger discount than if you were buying wholesale. Some thieves even stole things to order for you.*

—Ed McBain, *Eight Black Horses*, Avon, 1985, p. 68

この市の泥棒ときたら、やつらは問屋で買うよりも大きな値引きで売ってくれるんだ。なかには、注文を取って品物を盗む泥棒までいるんだ。

ここでも分かるように、代名詞 [they] でもう一度繰り返されている。ところが、話題化の現象では目的語を有標の主題にする。

(7) *These steps I never swept with a broom.*

したがって、先行文との関連をスムーズにするための手法で、旧情報の提示方法であることになる。一

方、左方転位では、まず新情報を提示し、その後にはやおら情報内容を示すわけである。このあたりの議論は村田（1982：242-46）が分かり易い。

2. 談話の背後の文化が分かるか

この観点からの話題は限りなく取り上げることができると言ってよいほど、最も厄介な分野である。

2.1 a Shirley Temple

Bil Keane が描く *The Family Circus* の中で Billy とウェートレスとの対話場面である。注文を取るウェートレスに対して、“I don't want a Shirley Temple or a Roy Rogers. I want a Sylvester Stallone.” と注文した。

資料 1



"I don't want a Shirley Temple
or a Roy Rogers. I want a
Sylvester Stallone."

対話が成立するのは、注文品としての *Shirley Temple* [ジンジャーエールやセブンアップにざくろシロップを加え、チェリーを浮かせたアルコール分のないミックスドリンク。1930年代のアメリカ映画の子役スターの名前にちなんだもの]、*Roy Rogers* [レモネードとざくろシロップを加え、チェリーを浮かせたアルコール分のないミックスドリンク。アメリカの西部劇スターにちなんだもの] の二つはよく知られたもの。

Sylvester Stallone の名前は、単純に子供が好きな俳優の名前を使ったもので、そういう名前の飲み物があってもおかしくはないのだが、子供特有の語用法の過剰一般化である。大人であれば、通常の談話として成立するところと、そうではないところとの間に線を引くことができるわけである。

2.2 Feed a cold and starve a fever

談話の中に、時にはクリシェと考えられるほどの

言い習わされた形で現れる諺は、そうであると理解するのは厄介なものである。⁵⁾

資料 2



— Reprinted with special permission of King Features Syndicate.

「軍曹殿、例のあの言い方は“Feed a cold and starve a fever” だったではありませんか、それともその逆であったでしょうか、お尋ねいたします」（第1コマ）と尋ねる Beetle Bailey に対して、これをそばで聞いていた Killer Diller が、「おまえは、いい古されてきた“Feed a fever, feed a cold” っていう諺のことを言いたいのか」（第2コマ）と答えた。もちろん、この Diller Killer の言い方は間違っているのだが、それは部隊一の食いしん坊である Orville Snorkel 軍曹への当て付けである。

“Stuff (Feed) a cold and starve a fever.” (風邪を引いた者にはたらふく食べさせ、熱のある者には絶食させよ) という言い方は、最初に記録に残っているものが1852年で、数年後の Mark Twain の書き物の中には次のような記述がある (Mieder 1992; Mieder 1993, など)。

The first time I began to sneeze, a friend told me to go and bathe my feet in hot water and go to bed. I did so. Shortly afterward, another friend advised me to get up and take a cold shower-bath. I did that also. Within the hour, another friend assured me that it was policy to “feed a cold and starve a fever.” I had both. So I thought it best to fill myself up for the cold, and then keep dark and let the fever starve awhile. (“Curing a Cold,” 1864)

2.3 My favorite food is macaroni and cheese.⁶⁾

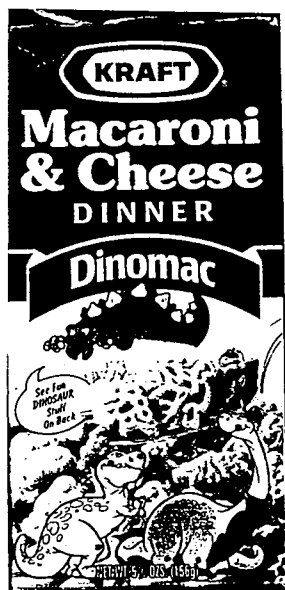
2.3.1 趣味や食べ物の好き嫌いを話題にしてドリルをする場合、イギリス文化、アメリカ文化、あるいは他の文化特有の、またはほぼ共通と思われるようなものがトピックになった時、これの正確な理解のためには余程の調査・研究が必要である。特に、食文化は厄介である。

例えば標題の言い方の中の *macaroni and cheese* はどうか。

まず、これがアメリカ英語の表現であって、イギリス英語では *macaroni cheese* となることを知らねばならない。

Macaroni is eaten in America in the traditional Italian manner—that is, with various sauces (most often tomato)—but a specifically American dish is *macaroni and cheese*, which is made by placing a layer of boiled macaroni in a buttered baking dish and grating over it American, Cheddar, or Swiss cheese, then baking it until the cheese has melted. This dish was first made in the nineteenth century and continues to be very popular. (Mariani 1983)⁷⁾

さらには、アメリカ文化の中ではどのような形で日常的に現れているのか。次の製品の存在も知らなければならない。



資料3

2.3.2 go to the toilet

高等学校外国語英語 I のある教科書に “Unknown Numbers of Wimbledon” と題する、テニスのウィンブルドン大会の話が題材になった課があっ

た。⁸⁾ その一部に次のような記述があった。

Umpires can't leave their chairs during a match. They are not allowed even to go to the toilet! [下線は山田]

下線部の表現については特に脚注もなければ、全編を通して英語の変種 (varieties) に留意した気配も読み取れない。

LDEC³⁾ は明確にイギリス英語であることを書いているが、例えば『カレッジライトハウス英和』などには何のレーベルもない。

近年オーストラリア英語が教室でも決して異質なものではなくなっているが、そのオーストラリア英語と文化についての知識や情報は十分ではない。山田 (1995) では、試みに *lolly* と *silent cop* についての調査結果と議論を提示した。

オーストラリアで好まれるものに *Vegemite* [商品名] がある。森本 (1994) は、

ベジマイト (★ペースト状の調味料・商品名)

と解説する。⁹⁾ 『リーダーズ・プラス』は、小文字で使うこともある (つまりは普通名詞化されるほど日常の文化の中で一般的なものになっていることを物語る) ことを示しながら、

ベジマイト ((野菜エキスで作ったペースト))

と解説していて、これだけでも記述が大きく違っている。再録はしないが、山田 (1990) が詳しく、正確である。念のため、MDを読むと、

a vegetable extract used as a spread.
(s.v. vegemite 1)

とあり、これもまた記述に片寄りがあることが分かる。



資料4 - Nicholson (1993)

2.3.3 safety guard

児童・生徒の登校時あるいは下校時に、街頭に出て旗を持って立ち、安全に道路を渡るための指導をする人を、アメリカ英語では *school (crossing) guard* と呼び、イギリス英語とオーストラリア英語では *lollipop man/lady* と呼ぶ (cf. 山田 1993c)。

〈イギリスの *lollipop man*〉



資料5 -George Wallace, *A Taste of Britain*, Shohakusha, 1996

ところが、生徒の中からこの仕事を果たす役割を与えられた者を *safety guard* と呼んでいる学校があることが分かった。¹⁰⁾

I got to Oxford Elementary School and I have a lot of responsibility. For example, I am a *safety guard*. (*Safety guards* go out in the middle of the street, hold a flag out and make sure cars don't hit the kids.)

2.3.4 pink-lady waitress

He decided to ask her to have a cup of coffee with him in the hospital coffee shop.

...

He signaled to one of the volunteer *pink-lady* waitresses and ordered two more cups of coffee, ...

-Ed McBain, *Mischief*, 1993, p. 37

病院内のコーヒー店でコーヒーでも一杯どうですかと、彼女を誘ってみようと彼は思った。(中略) 彼はピンクレディのウェイトレスの一人に合図をすると、コーヒーをもう2杯注文した。

アメリカでは、病院内でピンクの衣服に身を包んでボランティアで働いている女性が *pink lady* (または *Pink Lady*) と呼ばれることは、山田 (1982: 12-13) で正確に記述した (現在は『リーダーズ・プラス』にも収録されている)。意味用法が極めて制限される表現である。

3. 語の意味用法が分析できるか

どのような辞書に頼ろうとも、語の意味用法が完全な形で記述されているわけではない。例えば、前出の *delicious* がそうであった。どのような情報を手に入れる必要があるのか。

3.1 munch ; chew

Quirk (1995: 172) は、“the contrasts between pairs of items (chiefly verbs) within a particular semantics field, especially those which are quasi-synonymous” を調査・分析しようとした。その1例が *chew* と *munch* で、興味深い特性が分かった。

この2語は、例えば *LLA* を見ると、*munch* は *eat* の類に、*chew* は *bite* の類に入っており、一見意味用法が明確に違うかのように思える。

一般に、*munch* は、

- i) to eat, (esp. something hard) noisily and without trying to be quiet. *He was munching an apple.* [CIDE]
- i') 〈…〉をむしゃむしゃ [ぼりぼり] 食べる。[『カレッジライトハウス英和』]

とあり、*chew* は、

- ii) to crush (food) into smaller, softer pieces with the teeth so that it is easier to swallow. *You should chew your food well, or you will get indigestion.* [CIDE]
- ii') 〈食べ物〉をよくかむ、かみくだく [こなす] (以下省略) [『カレッジライトハウス英和』]

とある。当然のことながら、目的語に [+食べ物] を取る点で共通の特性があるわけだが、それ以上の特性が掴みにくい。確かに i) では、その食べ物の制限があるかのように見えるが、だからと言ってこの両語の特性が分かったわけでもない。

Quirk (1995) は次のようなテストをした。

- (1) They ... their sandwiches happily.
 (2) They ... the bacon reluctantly.

- (6) The girls stopped giggling and became serious. 少女たちはクスクス笑うのをやめてまじめになった。

目的語を替えてみてはいるが、

	Selections	Objections
(1) <i>chewed</i>	17	14
<i>munched</i>	46	2 ½
(2) <i>chewed</i>	41	8 ½
<i>munched</i>	15	22 ½

のような結果を得た。そこで、

Thus we can conclude that *munch* and *chew* contrast by an additional criterial feature of 'relish' latent in *munch*, which thus blocks its occurrence where the possibility of enjoyment is prevented.
 (Quirk 1995 : 184)

となろう、と言うのである。

3.2 giggle

辞書的にも少しよく見える意味特性は *giggle* の場合である。Quirk (1995) の調査を見ると、男性を主語にした場合はほとんど容認されないことが分かるが、これは多分に 'helplessness' (つまり [±control]) という特性のためではないかとする。そして、

- (3) He giggled { drunkenly.
 nervously.
 * happily.
 * politely.
- (4) She giggled { drunkenly.
 nervously.
 happily.
 politely.

のように対比させて見ると、*giggle* は女性により特有な特性を示す語で、特にその場合には "this 'helpless' feature can be suppressed" だというのである。

この特性が分かっているならば『カレッジライトハウス英和』が例文に、

- (5) She giggles at [over] anything. 彼女は何を見てもくすくす笑う。

を挙げているのが分かるが、だからと言ってこの語の意味用法の特性を悟れ、というのは無理である。ところが、*CIDE* には、

to laugh repeatedly in an uncontrolled and childish way, often at something silly or something that you know you should not be laughing at [下線は山田]

とあり、[±control] の特性らしきものが読み取れるのである。

また、*LDEL* (s.v. laugh, USAGE) には、

To giggle (in Britain used especially about young girls) is to laugh repeatedly in an uncontrolled way. [下線は山田]

ともある。

ここでもまた、新しい言語研究の成果に絶えず注目している必要がある。

3. Epilog

いくつかの具体的な観点から、英語教師に要求される英語力を考えてみた。このことはまた、大学の英語教師養成の上でも考えるべきことで、英語学とかその関連のカリキュラムの中で概論的に教えるだけの問題ではないことを指摘したい。

英語教師の養成には、学際的な情報を与え、言語と文化を理解するような訓練を与え、しかる後にそれらの豊かな情報を背景にした英語教育があるべきである。これまでも指摘してきたように、中学校の英語教師では指導方法に重点が置かれ過ぎる嫌いがあり、したがって基本的な言語と文化を理解することの努力が日常的に薄れてしまう。一方、高等学校の英語教師では、言語や文化の抹消的な現象に個人的な関心が置かれる嫌いがあり、しかもそれは極めて視野の狭いものであることに気付かないところがあり、さらには指導方法への関心が疎かにされてしまう。

Notes

- 1) 荒木・安井 (1992, s.v. Sociolinguistics) にも取り上げてある。

- 2) 最も新しくは『言語』(Vol. 25, No. 1, 1996年1月)が、「対話の科学」を特集して、談話の複雑さに注意を喚起している。
- 3) その後、『ジーニアス英和辞典』『ライトハウス英和辞典』などが競うようにしてこの特性を書き込んだ。
- 4) E.T. の本文のこれより数行前のところで、注釈者の青木栄一氏は「Yuck まあ (yes の意味)」(二見書房版, 1982, p.250) とするが、全くの誤りである。
- 5) アメリカ英語の広告の中で使われた例については、山田 (1993b) を見られたい。
- 6) アメリカ合衆国 Ohio 州 Cleveland 市の Oxford Elementary School 在籍の10歳の女子生徒からの e-mail. 渡部睦浩氏 (本校教官、英語科) から提供を受けた。記して感謝する。
- 7) もっとも、イギリスでは Elizabeth Raffald, *Experienced English Housekeeper* (1769) の中ですでに言及されているという (Ayto 1993)。ついでに、『カレッジライトハウス英和』のように「マカロニに粉チーズをかけて焼いた料理」というような乱暴な解説もある。
- 8) 公刊される前のものであるので、特定することを避ける。
- 9) 森本 (1994) の記述の不備については、山田 (1995) の中でも指摘した。
- 10) 6) に同じ。

References

- 安藤貞雄・山田政美 (1995), 『現代英米語用法事典』研究社。
- 荒木一雄・安井 稔 (1992), 『現代英文法辞典』三省堂。
- 今井邦彦 (1995), 「『期待』と『効果』のコミュニケーション論」『言語』Vol. 24, No. 13, 1995年12月号, pp. 36-43。
- 影浦 攻 (1993), 「外国語科教育 (英語) の重点課題と指導のポイント」山本政男 (編) (1993), 『新しい学力観読本』教職研修総合特集No. 103, 教育開発研究所, pp. 92-93。
- 小野寺典子 (1992), 「エスノメソドロジーにおける電話会話の研究と日本語データへの応用」『日本語学』Vol. 11, No. 10, 1992年9月, pp. 26-38。
- 太田 朗 (1980), 『否定の意味』大修館書店。
- 橋内 武 (1985), 「『もしもし』から用件に入るまで」『言語生活』No. 407, pp. 34-42。
- 福地 肇 (1985), 『談話の構造』新英文法選書 第

- 10巻。大修館書店。
- 村田勇三郎 (1982), 『機能英文法』大修館書店。
- (1984), 『文 (I)』講座・学校英文法の基礎 第7巻。研究社出版。
- 森本 勉 (編) (1994), 『オーストラリア英語辞典』大修館書店。
- 山田政美 (1977), 「社会言語学は英語教育に示唆を与えるか—会話分析の一例を通して」『中国地区英語教育学会紀要』No. 7, pp. 27-29。
- (1982), 『現代アメリカ語法—フィールドノート—』研究社出版。
- (1986), 『アメリカ英語の最新情報』研究社出版。
- (編) (1990), 『英和商品名辞典』研究社。
- (1993a), 「広告の中のアメリカ英語」『英語教育』Vol. 41, No. 14, 1993年3月, pp. 20-22。
- (1993b), 「英語教師のための言語学」『研究紀要』第36号, 島根大学教育学部附属中学校, pp. 1-10。
- (1993c), 『現代アメリカ英語を追って』こびあん書房。
- (1995), “Bounty is a pickup truck. — Not!” 『英語教育と英語研究』第12号, 島根大学英語教育研究室, pp. 23-55。
- 安井 稔 (1978), 『新しい聞き手の文法』大修館書店。

- Ayto, John (1993), *The Diner's Dictionary: Food and Drink from A to Z*. Oxford: Oxford University Press.
- Fox, James, Howard B. Woods and Christine Deeble (1980), *Telephone Gambits. A Module for Teaching Telephone English to Second Language Learners*. Hull, Canada: Public Service Commission of Canada.
- Halliday, M.A.K. (1967), “Notes on transitivity and theme in English, Part 2,” *Journal of Linguistics*, Vol. 3, pp. 199-244.
- Kettering, Judith Carl (1975), *Developing Communicative Competence: Interaction Activities in English as a Second Language*. Pittsburgh, Penn.: University Center for International Studies, and The English Language Institute, University of Pittsburgh.
- Lyons, John (1977), *Semantics*. Vol. II. London: Cambridge University Press.
- Mariani, John E. (1983), *The Dictionary of*

- American Food and Drink*. New York : Ticknor & Fields.
- McCarthy, Michael (1992), *Discourse Analysis for Language Teachers*. Cambridge Language Teaching Library. Cambridge : Cambridge University Press. (安藤貞雄・加藤克美訳『語学教師のための談話分析』大修館書店, 1995)
- Mieder, Wolfgang (ed.) (1992), *A Dictionary of American Proverbs*. New York: Oxford University Press.
- (1993), *Proverbs Are Never Out of Season: Popular Wisdom in the Modern Age*. New York : Oxford University Press.
- Nicholson, Margaret (1993), *The Little Aussie Fact Book*. New edition. Ringwood, Victoria : Penguin Books Australia.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985), *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman.
- Schegloff, E. (1968), "Sequencing in conversational openings," *American Anthropologists*, 70, pp. 1075-95.
- [辞書]
『カレッジライトハウス英和辞典』研究社, 1995。
[『カレッジライトハウス英和』]
『ジーニアス英和辞典』改訂版。大修館書店, 1994。
『ライトハウス英和辞典』研究社, 1984, 1990²
『リーダーズ・プラス』研究社, 1994。
- Cambridge International Dictionary of English*. Cambridge : Cambridge University Press. 1995. [CIDE]
- Longman Dictionary of Contemporary English*. 3rd edition. Harlow, Essex : Longman. [LDCE³]
- Longman Dictionary of English Language and Culture*. Harlow, Essex: Longman. 1992. [LDELIC]
- Longman Language Activator*. Harlow, Essex : Longman. 1993. [LLA]
- The Macquarie Dictionary*. Revised edition. Dee Why, NSW : Macquarie Library. 1985. [MD]

(やまだ まさよし・学校長・
島根大学教授・英語学)